



北山太樹：社会教育としての 海藻観察会 ～国立科学博物館の場合～

野外で行う観察会も博物館が行う重要な普及活動である。2002年度から実施が予定される学校の完全週五日制により、土日を選んで催される野外観察会も、将来さらに増強を求められることが予想される。博物館は小学生から高齢者までを対象としているので、観察会はすべての年齢層が同時にそれぞれに理解を深め、楽しめるものである必要がある。そのため博物館の海藻観察会は大学などの臨海実習とは少々趣が異なっている。例としてここでは国立科学博物館が平成10年8月8日に神奈川県稲村ヶ崎で行った観察会「稲村ヶ崎の海藻」を紹介したいと思う。

国立科学博物館では、関東地方で海藻観察に不適とされる6～8月の夏期をあえて選んでいる。海藻が豊富に見られるはずの春期の海岸は子供にとってはまだ寒く、梅雨が明けるまでは天候も崩れやすいからである。海岸での観察会は雨が降れば中止にせざるをえない。学生実習であれば悪天候もよい経験になるかもしれないが、小学生やご婦人には辛いだけである。また、一般的な生活をおくる人にとっては食用になる海藻を除外すれば、海水浴シーズンに出現する種こそがもっともなじみのある海藻であると思われる。たしかに夏の稲村ヶ崎海岸の海藻相は貧弱であるが、アナアオサ、ミル、フサイワツタ、ヘライワツタ、アラメ、カジメ、オオバモク、マクサ、ホソバノトサカモドキ、ユカリなど、図鑑にもよく出てくる海藻陣が出迎えてくれる。むしろ夏は初心者に適した季節といえるのではないだろうか。

観察会は採集会ではないので、海藻といえども磯に生えているものを採取して持ち帰ることは出来ない建て前である。稲村ヶ崎においても海藻類の採取を禁止する漁協・県警の看板が立っている。このような糞味噌な警告に腹が立たないわけではないが、ルールを守ることも大切な教育であるので磯の海藻類はながめるだけにとどめている。海藻標本の作製は砂浜に打ち上げられた海藻を使用して現場で体験してもらう。各参加者が2枚ずつ作った標本を講師が持ち帰り、乾燥後ラミネートしたものを郵送する段取りである。今年の参加者には、北海道の渡辺勇氏(今号〇〇頁図1参照)



写真1:「アラメの子」森垣みつ代(神奈川県在住)作アラメ、ミル、ボタンアオサなどを使用。

を真似て「海藻絵コンクール」と称し、打ち上げられている海藻で絵画にも挑戦してもらった。海藻の特徴を活かして江ノ島、花、昆虫、顔などの力作が制作された(写真1)。近年、遊びとしてのビーチコーミング(beachcombing)がはやりはじめた一方で、海藻の美しさを紹介した名書「海藻おしぼり」(横浜康継・野田三千代1996)の出版があった。海藻を拾い集め、砂の上に絵を描くことは、すべての年齢層に可能で、海藻の形を楽しむ、海藻学における初等教育といえるかも知れない。また、こうした野外観察会は海藻にふれながら実は世代の異なる人たちがふれあう機会であることはいうまでもない。(国立科学博物館)

【国立科学博物館】

自然観察会についての問い合わせ・申し込み先：〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20

国立科学博物館教育部企画課、TEL：03-5814-9875。その他の情報については本誌第46巻第1号35頁をご覧ください。